

第三十回 齋藤茂吉短歌文学賞

春日 真木子 『何の扉か』

角川文化振興財団

選考委員

委員長 三枝昂之

委員 小池 光

小島ゆかり

永田和宏

【贈呈式】

令和元年五月十九日(日)

(五十音順)

春日 真木子 『何の扉か』 (自選)

検閲を下怒りつつ畏れるし父の身回り闇ただよへり

校正をGHQへ搬びしよわれは下げ髪肩に揺らして

いたはられ坐るほかなししほしほと炎昼こもるわれは「ゑ」の字に

燃え尽きるまへに小さき尾を振れり遊ぶごとしも炎の終り

さくら散る時間ときの光を曳きて散る 何の扉か開くやうなる

老いたるは化けやすしとぞ くさかんむり ㊦ かぶれば花よ 私は生きる

九十歳のわれの腕かひなに湯気ぬくし女めのみどりこの桜じめりよ

九〇歳は吉事よしごとにあらめこれよりはボーナスタイムよ朗ら澄む空

治療室のベッドは高くのぼれざり然さらば背面跳びすべの術すべにて

法案の強行採決戦そののきて坐る丸椅子 あ、背凭れがない

六月十五日

春日氏の歌業をよろこぶ

三枝 昂之

今日ますます存在感を増している春日氏の受賞をまず喜びたい。

潔く辞めむといふ父^{いせ}潔^{いせ}わるく続けよと宣らす尾上

柴舟

占領軍検閲に苦しむ歌誌発行の現場を軽みに包んで示す手際が楽しいが、それを「さういへば蟬の字体の口ふたつ失ひたりしは戦後なりしか」と今日の危うさに繋げるところに時代を知悉する人ならではの厚みがある。

老いたるは化けやすしとぞ^{くまかんせり}サかぶれば花よ 私は
生きる

稲妻を裾に奔らせ富士の秀^ほをつまみあげたり葛飾
北斎

人生のベテランならではのユーモアと表現力も堪能できる一冊、今日の短歌をまた一步豊かにする成果が茂吉賞に加わった。

ベテランの底力

小島 ゆかり

九十年代に入る第十三歌集にして、さらに新しい突き抜けた自在さと、厳しい覚悟を秘めた時代の証言とが、まことに魅力的な一冊である。

まさに、ベテランの底力を見る思いがする。

いたはられ坐るほかなししほしほと炎昼こもるわ
れは「ゑ」の字に

一人一首の掲載なれど軍事郵便待ちて加へき戦場
詠を

筍のやうにならべる新生児番号札を確かめて抱く
平皿をゆるりと廻し拭きあぐる独りの時間こども
瀬戸際

虚飾のない文体と独自の眼差しが、切実で迫力のあるリアリティを感じさせる。過去の業績はもちろんながら、この一冊の力にまずは敬服する。

おめでとうございます。

時代の証言

小池 光

大正世代である春日真木子氏は、戦中戦後の激動の時代を短歌雑誌発行の現場にあつて身をもってこれを体験した。この歌集はその時代の証言という一面をもち、貴重である。

警報の解ければゲートル巻きのまま瞻写に向かふ
あな甲斐甲斐し

校正をGHQに搬びしよわれは下げ髪肩に揺らし
て

こういう努力と情熱によって短歌は支えられ、困難な時代をおどろくべき生命力で生き続けてきた。

またそれとは別にこの歌集にはほのかな老いのユウモアを感じさせる歌が点在する。

治療室のベッドは高くのぼれざり然らば背面跳び
の術^{すゑ}にて

走り高跳びの「背面跳び」がこういうところに出現するとは思ひもよらなかつた。あのフォームは確かに高いベッドに横たわる姿勢である。発想痛快だ。

好奇心ますます

永田 和宏

春日真木子さんの歌業を拝見していると、歳をとるといふことと老いるといふことはまったく違うのだと思うことが多い。多くは精神の自在さに由来するのだろうが、自在さはまた好奇心の別称でもある。歌集『何の扉か』は、扉の向こうにあるものへの作者の飽くなき興味が横溢しているという強い印象を残す。

逢ひて振り別れて振りしてのひらの儂し重し今日
のてのひら

私の好きな一首であるが、韻律の緊張と、しかしその緊張の間に漂うある種の遊び、隙間の見える余裕が、春日真木子さんの長い歌業の時間を感じさせてくれる。

父松田常憲への途絶えることのない強い思いはこの一冊にも明らかだが、戦時の雑誌経営、特に「水甕」が受けた検閲などを検証し詠うことによって、現在の日本社会の危うさにも警鐘を鳴らし続ける作者の営みは、我々後続世代に強い叱咤とも感じられ、そして感じなければならぬと思うのである。

受賞のことば

春日 真木子

このたびは齋藤茂吉先生の御名の文学賞をいただき大きな喜びに浸っております。「何の扉か」に光をあてて下さいました選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

私が作歌をはじめましたのは昭和三十年、戦後十年を経ての女性解放の時期でした。私はストリートに不如意でした現実への抵抗を詠みました。その時、父の松田常憲が書架より茂吉歌集を引き抜き私にすすめました。

赤茄子の腐れてゐるところより幾程もなき歩みなりけり

『赤光』

めん鶏ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり

『赤光』

まだ初歩の私には分らないながらも、こうした作品に他の歌人とは異なる不可思議な雰囲気を感じました。今も作歌に行き詰まる時、茂吉短歌を読み返し、多面的に重層的にひろがる作品に刺戟を受けています。短歌の韻律が黄金律となる茂吉先生の言葉の魔力を今後も学びながら、私の生命の歌を作りたいと思います。九十三歳の私に、このような前向きな思いを抱かせて下さいましたのは、授賞のお蔭でございます。ほんとうにありがとうございます。



第30回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

春日 真木子 (かすが まきこ)

歌人。1926年（大正15年）鹿児島生まれ 93歳。
昭和30年「水甕」入会。現在、代表、選者。編集発行人。
現代歌人協会会員、元理事。日本文藝家協会会員。
明治神宮総合歌会顧問、元常任委員。「柴舟会」元代表。
平成27年 宮中歌会始 召人。

【主な著作等】

歌集：昭和47年『北国断片』、昭和54年『火中蓮』、
昭和57年『あまくれなみ』、昭和62年『空の花花』、
平成3年『はじめに光ありき』、平成7年『野菜涅槃図』、
平成11年『黒衣の虹』、平成16年『生れ生れ』、
平成18年『燃える水』、平成21年『風の柱』、
平成23年『百日目』、『弥勒のうなじ』（伊語による翻訳歌集）、
平成27年『水の夢』、平成30年『何の扉か』

著書：昭和63年『自解100歌選』、平成5年『私の短歌作法』
平成16年『野方ノオト』

受賞歴：昭和54年第7回日本歌人クラブ賞、
平成3年第13回ミューズ女流文学賞、平成17年第41回短歌研究賞、
平成28年第7回日本歌人クラブ大賞、
平成30年第41回現代短歌大賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆
- 第二回 本林勝夫
- 第三回 塚本邦雄
- 第四回 前登志夫
- 第五回 斎藤 史
- 第六回 近藤芳美
- 第七回 小暮政次
- 第八回 馬場あき子
- 第九回 吉田 漱
- 第十回 佐佐木幸綱
- 第十一回 伊藤 博
- 第十二回 森岡貞香
- 第十三回 竹山 広
- 第十四回 藤岡武雄
- 第十五回 清水房雄
- 第十六回 小池 光
- 第十七回 三枝昂之
- 第十八回 花山多佳子
- 第十九回 永田和宏
- 第二十回 河野裕子
- 第二一回 伊藤一彦
- 第二二回 品田悦一
- 第二三回 篠 弘
- 第二四回 秋葉 四郎
- 第二五回 栗木 京子
- 第二六回 小島ゆかり
- 第二七回 柏崎 驍二
- 第二八回 橋本 喜典
- 第二九回 大辻 隆弘

- 『親和力』 砂子屋書房
- 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 『黄金律』 花曜社
- 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
- 『秋天瑠璃』 不識書院
- 『希求』 砂子屋書房
- 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 『飛種』 短歌研究社
- 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 『吞牛』 本阿弥書店
- 『萬葉集釋注』 集英社
- 『夏至』 砂子屋書房
- 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 『滴滴集』 短歌研究社
- 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 『後の日々』 角川書店
- 『母系』 青磁社
- 『月の夜声』 本阿弥書店
- 『齋藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房
- 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店
- 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』 ―戦争と齋藤茂吉― 岩波書店
- 『水仙の章』 砂子屋書房
- 『泥と青葉』 青磁社
- 『北窓集』 短歌研究社
- 『行きて帰る』 短歌研究社
- 『景德鎮』 砂子屋書房

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一八五七〇 山形市松波 丁自八一

山形県観光文化スポーツ部県民文化スポーツ課内

TEL・〇三三六三〇一三〇六